

道教組・教文ニユニヌ！(仮)

全北海道教職員組合 dokyoso@seagreen.ocn.ne.jp 2020.5.1 No.2 文責:道教組教文担当 内藤 修司

「コロナ後の学校づくり」への力合わせのアイデアをみんなで考えよう

入学式・始業式はできたものの、2週間の学校生活を経て再び一斉休校となった北海道。「5月10日までの臨時休校」が要請され、その後の学校再開はいまのところ見通せない状況にあります。

2月26日に「1週間の臨時休校」が決定され、その後は各市町村・各学校で対応に翻弄し、先生方には不安や疲労が広がっています。4月、再びの一斉休校となったいまは子どもたちも、保護者のみなさんも先行きが見通せない現状にストレスがたまっています。



このような状況の中で、私たちは道教組として「コロナ終息後の学校づくり」を見越して知恵と経験を寄せ合い、学校教育の意味と学校再開後の子どもたちの姿を考えていきたいのです。

ぜひ、あなたの「いま」の想いを教えてください。そして、これまでの教員生活で得た経験や教育条理を最大限に生かし、「**コロナ後の学校づくりで、子どものためにこんな力合わせができる**」というアイデアを教えてください。

道教組では、5月上旬をめどに、【提言】の形で「コロナ後の学校づくり」について発信をします。

現段階で考えられる論点として

【1】いま、子どもたちはどのように過ごしているのか。

4月17日、休校直前の日。玄関で帰り際に「せんせい、わたしは学校に来たくてしょうがないんだよお…」と手を握ってきて訴える高学年の子がいました。子どもたちはいま、どんな思いでいるのでしょうか。様々な家庭環境がある中で、食べることや生きることに困難を抱えている子はこの「一斉休校」をどんなふうに過ごしているのでしょうか。

【2】「教師の専門性」に基づいて、「学校」の意味を考えよう

ネット授業や「9月入学」、授業時数の対応など、様々な話題が扱われるようになりました。私たちが持っている道理や教育条理に照らして、こうした話題をどう考えるべきなのでしょう。**私たちはいま、「協力・協同の学校づくり」に基づいて実践される学校教育のひとつひとつの意味を問われている**のです。

【3】「コロナ後の教育課程づくり」をみんなの力合わせで考えよう

6月に学校再開したとして約5週間分の時数減が…。時数減はさらに深刻になることも考えられます。子どもたちは学校に来ることを楽しみにしている一方で、学校再開後にはストレスを表現することも考えられます。こうした中で、学校再開後には授業時数を気にして「詰め込む」のではなく、**子どもたちの成長と学びの連続性を意識して大胆な「精選」をして教育課程を再構成することが必要**です。教師の専門性を発揮し、**コロナ後の教育課程づくりを共に考え合う**ときです。

【4】教職員ぐるみの力合わせで学校づくりを進めよう

2月末以降、「通知」や「要請」という行政的な動きに学校現場は翻弄させられてきました。通知や要請による縛りがあるために、学校ごとの民主的な議論や決定が難しい状況にあります。しかし、本来であれば**校長先生をリーダーとして民主的な議論が行われるべき**です。そして、**教職員組合をはじめとする教育関係団体は、それぞれの専門性を発揮して学校づくりへの力合わせを進めましょう**。改めて、子どもたちを中心に据えた協力・協同の学校づくりを、たくさんの方々と進めるための知恵を出し合いましょう。



道教組 Facebook グループでの議論や、メールで投稿いただく形で、全道の道教組に集う先生方の声を集め、盛り込んでいきます。連休中の取り組みとしてお付き合いいただければ幸いです。